# 『一地球住人の火星への旅』(1790年)

## —古書渉猟 (2)—

大 久 保　進

1

もう20年近く前に，たまたま眼を通していた郁文堂の社誌《Brunnen》(Nr. 198. Dez. 1977) に載っていた前川道介さんの一文 (Glückliches Biedermeier (13). § Luftballon.) で，私は標記の作品とその復刻版のことを知りました．この頃丁度クリスティアーン・フリードリッヒ・ダーニエル・シューバルトとその周辺のことを調べていた私は，前川さんの紹介に釣られて，何かの参考になるだろうと考えました．郁文堂に照会したところ幸いにも在庫があって，早速一本を購い興味深く読んだことを，記憶しています．

したがって，私の手許にある原書は無論オリジナルの古書ではなく，その復刻版です：

Carl Ignaz Geiger: Reise eines Erdbewohners in den Mars. Faksimiledruck der Ausgabe von 1790. Mit einem Nachwort von Jost Hermand. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung: Stuttgart 1967. [Sammlung Metzler: Realienbücher für Germanisten. Abt. G: Dokumentationen. (Reihe b: Zu Unrecht vergessene Texte.) M 61.]

このメッツラー叢書の復刻版の方はA 5変形版ですが，原著の判型はいわゆる八折版と想定されます．総頁数は86頁．ノンブルは4ページ目から打たれています．先立つ3頁分は扉とその裏頁と本文の1葉目です．各頁の判面は横60ミリ×縦113ミリ（ノンブル行およびフット・ノート行を加えると，118ミリ)，この両行を除いた各ページの行数は25行，1行の文字数は約40字で，そして本文の活字サイズは大体今の11ポイントにあたります．その他気のつく点は，81ページ目のノンブルが18と平気で逆転していたり，不注意な誤植が散見すること，そしてインクの乗りが一様でないために印刷面がスッキリしない頁があり，また印字が滲んでシャープでない箇所がかなり目立つことです．復刻版であることを考慮しても，これでは丁寧な仕事だったとはとてもいえません．むしろ急ぎ仕事だったことを推測させます．印刷所が元々そういう仕事振りの所だったのか，それとも何らかの事情で作者が出版を急いだためなのか，俄かに判断することはできません．特に前者については資料皆無といったところで何ともいえません．

扉には，この一種の空想科学物語のタイトルとモットーと出版地・出版年が印刷されていますが，作者名だけはありません：

Reise / eines / Erdbewohners / in / den Mars. // —— Pictoribus atque Poetis / Quodlibet audendi semper fuit / æua potestas. / Horat. // Philadelphia, / 1790.

扉の裏頁にもモットーが印刷されています：

Inspicere tamquam in speculum— / ----suadeo / Terent.

ドイツ語の部分はドイツ字体で，ホラティウスおよびテレンティウスからのラテン語の引用文はラテン字体で印刷されていますが，この点は本文中でも同じ扱いになっています．モットーというものは，順説的にであれ逆説的にであれ，作者の，あるいは作品の意向を示しているはずですから，念のために両引用文の日本語訳と出典を添えておきます：

ホラティウス(„De arte poetica“, 9 / 10.)：「ヤハリ何トイッテモ，画家ナラビニ詩人達ニハ，考エウルドンナ大胆ナ試ミモ常ニ許サレテイタノダ．」

テレンティウス(„Adelphoe“, III, 3, 62.)：「アタカモ鏡ヲ覗キ込ムヨウニ覗キ込ムコトヲ……私ハ勧メル．」

ところで原著は，作者名無しで出版されたばかりでなく，出版地も偽装されています．すなわち，フランクフルト・アム・マインなりライプツィッヒなりから(復刻版への後書の中でヨースト・ヘルマントは，出版者としてフランクフルトのヨーハン・ゴットロープ・ペッヒの名を挙げ，慎重にも，括弧書きでライプツィッヒの出版業者名を異説として紹介しています)，建国後間もないアメリカのフィラデルフィア，つまりアメリカ革命の中心地に移されています．この匿名性，あるいはこの偽装の意味を正しく受けとめることができるためには，当然のことですが，一方では，一地球住人の火星旅行記に仮託したこの同時代批判の書の内容に立ち入り，他方では作者の置かれていた時代状況と作者のこの時代との関係に眼を向けねばならないでしょう．ここではそれを百も承知であっさり，作者はカール・イグナツ・ガイガー，と記します．その方が本書の紹介を先に進めやすいですし，復刻版刊行者であるヘルマントがそう判定しているのですから，とりあえずはそれで十分ということにさせていただきます．しかし，この人定問題に興味のある方は，村田竜道さんの『放浪作家ガイガーと 18 世紀末ドイツ』(1993 年，松籟社)の「序章　大胆に過ぎる仮説」をご一読ください．この問題に関してばかりでなく，ガイガー問題について一通りの知識を獲得したい方には，この本は日本語で読める唯一の参考書のはずです．私がここで紹介している『一地球住人の火星への旅』についても，それに最終章を当てています(「第三章　飛行船とタヒチ島」)．

ヘルマントの調査を信ずるかぎり，カール・イグナツ・ガイガーという人物が実在したことは確実です．参照すべき主たる論文は，本書復刻版へのヘルマントの後書と，この後書の増訂版といえる次のものです：

Jost Hermand: ‹Der Fall Geiger›. In: J. Hermand: Von Mainz nach Weimar (1793-1919). J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung: Stuttgart 1969.

ガイガーは，1756 年 4 月 24 日，中部フランケンのヴァイセンブルク郡エリンゲンに，フランケン管区ドイツ騎士修道会顧問官クリストフ・ガイガー某を父とし，マリーア・アンナ・ドロテーアを母として生まれました．南ドイツのどこかの大学で法学博士の学位を取得して帰国した(らしい)彼は，この地の領主であったフランケン管区ドイツ騎士修道会長官フランツ・ジーギスムント・アーダルベルト・フォン・レーアバッハによって疎まれ，所払いの憂き目に遭い，以降，1791 年 3 月 21 日，肺結核のために 34 歳の若さでシュトゥットガルトへの旅の途上で窮死するまで，放浪の生活を送ります．死に臨んだ彼が友

人に託した原稿が，彼の遺志にしたがって，彼自身がかつてその寄稿者であった雑誌『新・ドイツの観察者』に掲載されます（第7巻第20号，1791年）．この遺稿の文章は『アードルフ．当代の知識人伝への一寄与』と題されていて，掲載にいたる経緯を記した雑誌編集者の脚注と，原稿を託された友人の「送付者の付言」とガイガーの著作リストとが付されています．この脚注と「付言」によって，この一知識人の伝記はすなわちガイガー自身の自伝の試みであることが明かされます．これを受けてヘルマントは，一方で，死後ほとんど完全に忘れ去られてしまった，より刺激的にいえば，ほとんど抹殺されたと評してよいかもしれないガイガーを，その伝記＝自伝を個人史と時代史の交差の中で跡付けることによって救出しようと企図し，そのためにも他方で，このガイガーの著作リストを他の文献目録類によって補完して11件の著書および2件の雑誌のタイトルを挙げるとともに，未発見作品の探索に従事し，相応の成功を収めたのです．彼の作品の匿名性（これらの著書のうち実に8タイトルが作者名無しで，しかも／あるいは出版地・出版者名まで偽装して刊行されています）は，ガイガーにたいするこの冷淡な無視，あざとい言い方をすれば村八分的な拒否と深い所で否応なく関わっているはずです．

## 2

この物語『一地球住人の火星への旅』は大まかにいって四つの部分，すなわち，語り手である「私」の率いる地球人一行の飛行船による火星到着までを扱った部分（8ページまで）と，火星上で順次滞在した三つの国での彼らの体験を報告した部分から成っています．最初のパーパグアン国（Papaguan）については9～49ページで，一番多くの紙数が割かれています．二番目のプルンプラツコ国（Plumplatzko）とその首都ヴィラ（Wirra）については50～56ページ，わずか7頁ほどの記述です．最後のモーモリ国（Momoly）とその首都ワシャンガウ（Whashangau）については58～85ページにわたり，パーパグアン国につぐ紙量にすぎませんが，質的にはこの部分にこそ作者の主張の核心があります．なお，56～58ページでは，一行がもう一つの国ビーリビ（Biribi. 首都ゼーポリス Sepolis）には着陸せず，その上空を通過して，モーモリ国へ直航する次第が記されています．そして最後の85／86ページでは，地球への帰路の叙述を丸ごと省いて，地球帰還後の「私」が地球で果すべき使命が語られています．

開巻第一頁において「私」は，新たに誕生した共和国アメリカから，同時代のヨーロッパの，あるいはドイツの風潮にたいして憤懣と侮蔑を送り届けています．すなわち，ヨーロッパの科学技術の一大功績として吹聴される気球あるいは飛行船への熱狂を槍玉に挙げて笑い飛ばし，それが製紙業者モンゴルフィエ兄弟や物理学者シャルルの独創ではなく，すでに1670年に，シナで布教していたイエズス会士ラーナが，そしてまたスペインのバルトロメオ某が発明していたと，すなわち古代の発明であると強調し，希望に満ちた輝かしい未来を約束する科学技術の進歩なるものへの盲信・狂奔を，自然からの逸脱・自然の否定による堕落と破滅を招来するものと予感すらしているようにみえます．そして，この予感はやがて最後のモーモリ国の段になって確信をもって主張されることになります．

しかしそれでいて，矛盾するようですが，「私」は自らラーナの飛行機械を当代の学者たちの助言・助力をえて改良し，宇宙飛行を可能にするための空気貯蔵装置や飛行位置を測定するためのマイル計を装備して，つまりは科学主義的にことを準備して，異星への飛行を決行します．私たちの惑星上にはもう，新しく何かを言える余地は掌の大きさほども存在しない，というのです．これは，火星到着までの行程の記述とともに，一方では科学的探検・旅行なるものにたいする同時代の熱狂への風刺を含んでいるでしょう．注目すべきは，当然のことですが，どんな旅行記も探検記も依拠している比較という方法です．目的地の珍しい植物や動物や自然，人間や風物，産物や生活あるいは習俗について記述する際に，報告者は意識的にか無意識的にか，彼我を比較観察し比較考察します，そしてそれによって新しい知識を蓄え，最終的にはそこから何らかの教訓なり利益なりを引き出そうとします．このような旅行や探検は，それ自体の与える喜びや苦しみも貴重ですが，他者を「鏡」として自己を批判的に照射する絶好のチャンスとなるでしょう．探検記や旅行記に報告されるいっさいの難儀を直接味わう必要のない読者にとっては，したがって，本書の扉の裏頁に掲げられたテレンティウスの忠告に従うことは，それだけ容易なはずです．

この脈絡でもう一つ指摘しておかねばならないことは，飛行小説（復刻版への後書の中で，ヘルマントは本書をこの用語で括り，同種のいくつもの作品に言及して，その性格付けを試みています）のもつ時代批判・社会批判的な性格です．詳細はヘルマントに譲りますが，例えばジャン・パウルの政治的教養小説『巨人』第 2 巻の付録の一つである『飛行船乗りジャノッツォの航海日誌』の名を挙げるだけで，説明には十分でしょう．つまり，激情的で短気な毒舌家であるローマ出身の画家ジャノッツォの，すなわち，元々批判的な意向をもちあわせている主人公の天空への上昇によって，対象にたいする彼の垂直的距離と鳥瞰的位置が確保され，これが彼の批判・弾劾のための枠組となっているからです．本書の場合にはこれに，地球上ならぬ別の天体への飛行の契機が加わわって，空想上の旅行（記）という，大昔から同時代批判者によって愛用されてきた文学的策略が，ホラティウスからの引用にまつまでもなく，よほど鈍感な読者にとっても明確に意識されることになる訳でしょう．であればこそ，立場によっては逆に，当時ベルリンの啓蒙主義者たちの一拠点であった，フリードリッヒ・ニコライ創刊の書評雑誌『一般ドイツ文庫』の書評子 Gf. のように（第 104 巻第 1 号，1791 年），曲解と歪曲によって本書の意図を矮小化しようと企てる者も出て来るのでしょう．

## 3

「私」は長男と，航海士に任ずる二人の老練の博物家と，そして若干の水夫とを伴って，勇躍壮途につきますが，やがてマイル計の故障で目標を見失い，航海士が空気の蓄えに不安を抱き始めます．ようやく新しい気圏に入って空気の蓄えの心配も解消した一行は，眼下に発見したどこまでも広がる陸地に着陸します．そこが，火星でした．降り立った一行の前には森や河川や山々や町々がありましたが，町は地球のそれとはずいぶんと違っていました……

この後，火星の地球との違いを意図的に読者に印象づけるために，この地の家屋について，その材料と形状（石ではないけれども，石よりはるかに軽く，それでいて石と同じように硬い当地産の材質でできており，小さくて低く，細長い），その機能（巧妙に一種のローラーの上に建てられていて，ほとんど背中に瘤のないラクダのような，異常に馬力の強い足の速い動物によって牽引されて，人々は屋内に居ながらにして意のままに移動することができます）が記述され，居住場所の移動による家屋の集散・離合によって，文字通り一夜にして町が消失したり出現したりする不思議が報告され，そしてこのような移動式の家屋のもつ社会的意味が指摘されます．すなわち，牽引動物の頭数の多寡がその家屋の所有者の社会的・経済的な地位の高低に対応していること，したがって，国君は，普通の場合の2頭ではもちろんなく，しかしまた国家第一等の大金持ちたちの場合の4頭，6頭あるいは8頭でもなく，24頭のラクダもどきを繋いで移動すること，したがってまた，自分の足で地面を移動するのは通常家を所有していない貧乏人だけであること，そして，家を所有していないことは恥ずべきことであって，それもつまりは，自らの足で地面を移動すること自体が不名誉だという，この国の人々の古来の生活習慣にどうやら関係があるらしいこと（その証拠として，腹這いになって道路上を覆い尽くす国民の身体の上を国君が歩行移動する，国君外出時の異様な図が伝えられます）が説明されます．

少しく細部に立ち入りすぎたかもしれませんが，それは，このような記述の作者における意図を明確にしたいと思ったからでした．火星と地球との違いを際立たせるような記述を意識的に着陸直後の報告として配置することは，本書が異世界への（空想上の）旅行記であることを読者に強く印象づけることにも当然役立っていますが，しかしそれはまた，このことを利用しながら，読者が以下に続く本文の何処かで，異世界の事柄であると印象づけられてきたところのものが実は自世界の事柄であることに，不意にあるいは予感通りに（「アタカモ鏡ヲ覗キ込ムヨウニ」）思いいたるための絶好の瞬間を用意することにも，貢献しているのだと思います，事実，「私」自身が「ココモ私タチノ所ト同ジダ」と慨嘆する時が来ることになるのです（プルンプラツコ国の段）．

しかし多分本当は，一寸知識と連想の力があれば昔の人でも，そして今の人なら無論分ることだと思いますが，パーパグアン国の移動式家屋自体の着想は丸ごと独創的という訳ではないでしょう．当時の，つまり18世紀も終りに近づいていた時期のヨーロッパにとって，アジアのモンゴル族のことは当然として，アラビアのベドウィン族のことも北アメリカのインディアン諸部族のことも，そして彼らの居住習慣（折畳み式の可搬性住居）も既知のものだったのですから．しかし，ローラー（あるいは車輪）を備え動物によって牽引される箱形車両状の移動式家屋というイメージは，視点を換えれば，何よりも先ず同時代のヨーロッパの重要な陸上交通手段である馬車のそれではないでしょうか．これは，少しく先走って言ってしまいますと，本書最後の段，モーモリ国のユートピア的イメージが，ブーガンヴィルやゲーオルク・フォルスターの『世界周航記』の特にタヒチ島に関する報告に，そしてまた独立戦争を戦っている，あるいは共和国として新たに出発したアメリカについての同時代の報道に，ということは同時に当時のヨーロッパの常識に負うところ大である

のと同断であるというばかりではなく，同じ物や事柄が，試みに視点を換えることによって，この場合でいえば，火星人の常識を地球人の眼で捉えるとともに，逆に地球人の常識を仮に火星人の眼を一度通過させてから描写することによって，「覗キ込ム」べき「鏡」をもう一枚互いに向き合うように立てることを意味することにならないでしょうか．

閑話休題．着陸した飛行機械と搭乗者たちを見ようと物見高く人々が集ってきます．異星人の空からの来訪という大ニュースを受けて，この地の君主は三人の神官を派遣します．「私」たち一行が火星で第一歩を記したこのパーパグアン国が教権的国家であるらしいことは，見物人たちの態度から難なく看取できます．見物人である国民は，もっとも学識ある神官たちのうちからどんな言葉でも理解できないものはないとの理由で選ばれたこの三人を迎えて，ひたすら懼れをなして恭しく道を空けるばかりなのです．神官たちの使ったいくつかの言葉のうちの一つが，大体が堕落したラテン語からなるゴッタ煮のような言葉であることが分って，両者の意思の疎通が可能となりますが，ここにも物語展開上の一種の科学主義が貫かれていると指摘することは，もはや余計なことでしょう．因みに記せば，後になって，この言葉はこの惑星上ではギャラントな，したがって宮廷・上流の言葉の一つであることが判明します．地球人たちは見物人たちの言葉を，身振り手振りから推測はできても，理解できないでいたのです．

ギャラントな言葉ということについて補足しておけば，文学語としてのドイツ語にたいする宮廷・上流社会における一般的な嫌疑は，バロック期以降も強固に生き続けており，ガイガーは放浪の途上，例えば一時期のシューバルトと同様，ドイツ語で書かれた優れた文学作品の朗読・紹介によってこの風潮に対抗しようと試み，またそのことによって口を糊してもいたことを指摘しておかねばなりません．当時のドイツの宮廷社会と市民社会とにおけるドイツ語の，しかしまた古典語としてのラテン語や近代語としてのフランス語などの文化的・社会的位置付けを想起しなければ，この物言いは理解できないままでしょう．

「私」と三人の神官とのやりとりは最初のうちこそ友好的ですが，知識欲旺盛で理性信奉者である「私」は，相手の答えや説明に素朴な，しかし根本的な疑問を懐き，それを直截に口に出します．結果として，地球人一行は神聖冒瀆の廉で拘束され，石打ちに処せられ，塔の地下牢に監禁されてしまいます．獄中の長い一夜が明けて審理のために君主の居城に連行された彼らを，昨日の神官が君主の面前で追及し，神を冒瀆した悪魔の使いとして火炙りの刑に処することを要求します．しかし君主は彼らに抗弁の機会を与えます．地球人の証言を聴取した君主は，彼らの神聖冒瀆の発言なるものを異邦人の無知のなせる業として彼らに無罪を宣し，神官たちの手から彼らを解放し居城に保護することになります．しかし数日後には，ことの次第に納得せず怒り狂った神官たちの陰謀によってこの寛仁大度の君主は暗殺されてしまいます．昼食会の席で毒を盛られて，手当の甲斐もなく苦しんだ末に死んでしまうのです．「私」たちを含めて陪席した者たちも毒を飲まされる羽目となりましたが，治療によって幸い回復に向かいます．こうして命辛々，短い間のこととはいえ立派な君主との交わりを懐かしみながら，夜陰に密かに出発の準備をした「私」たちは，夜明けとともに再び飛行船上の人となります．

君主の暗殺という重大な，しかしヨーロッパ史においてはかならずしも稀ではない結果を惹起した「私」の神聖冒瀆的な議論は，容易に推測できるように，パーパグアン国の宗教と教会に関わっています．しかし，「アタカモ鏡ヲ覗キ込ムヨウニ」これを「覗キ込ム」ならば，それは直ちにヨーロッパのキリスト教，なかんずくカトリック教会を批判的に照射するものとなります．上で言及した書評雑誌『一般ドイツ文庫』の書評子はこの批判について，これまでもすでに数限りなくほとんど同じ言葉で繰り返されてきているので，退屈きわまりなく，全くうんざりだ，と貶しています．この貶下が正当であるとは到底思えませんが，この批判の内容がこの書評雑誌の読者によって時代の一論題として，あるいは少なくとも知識として共有されていたことの，これは皮肉な証拠と考えて良いでしょう．

さてここでは立ち入る余裕はありませんが，「私」のこの議論の論点は二つあって，一つは教義論的なレベルの，そしてもう一つは教会制度論的なレベルのそれです．パーパグアン国で知識と政治的実権を専有している神官階層の側からするならば，神の奇跡に基づく教義と教会とは，寸毫の疑念も質問も批判も差し挟むことなく信じられねばならない絶対的な真理であって，したがって，健全な理性を信頼してこの問題に，つまりパーパグアンの宗教における三位一体，原罪，処女懐胎，子なる神の犠牲の死，権威としての聖書，そして洗礼式と聖餐式という教義上の諸問題と，こうした教義に基づいて制度化されている権威的で暴力的な教会の問題に批判的に対峙する「私」は，その批判の中身以前に，その行為の故にすでに当然瀆神者であり異端者であることになります．(どんなに鈍感な読者にも，何が問題になっているかを，パーパグアンの宗教ではなくてキリスト教が標的であることを意識させるために，神の子が火星の地上を去ってはや500年以上も経っていることになっています．つまり，「私」の説明によれば火星の1年は地球の3.5年に当たりますので，地球の数え方でいえば，1790年の時点で1750年以上前ということになる訳です．)

この強権的教会に抵抗して地球人一行を窮地から救い保護したパーパグアンの君主は，ヘルマントにとっては，同時代の多くの人々によってプロイセンのフリードリッヒ二世とともに英明で実行力のある啓蒙君主として期待されたハープスブルクのヨーゼフ二世以外の何者でもないようですが，そう思わせる要素があるにしても，そうと決めてかかる必要もありませんし，また逆に，ヨーゼフ二世ではないと断定するにもおよばないことでしょう．それはとにかく，彼は人間的魅力に溢れた人格者として，家庭の良き夫・良き父として，宮廷の良き主宰者として，しかし悩める不遇の為政者として，そしてまた開明的人間の良き友人として形象化されていますが，実権ある君主としてだけは登場しないのです．だとするならば，ここで着目されるべきことは，国政における理想的君主の，つまり英明で実行力のある啓蒙君主の待望論ではなくして，むしろ教権的国家における啓蒙君主の政治的虚構性なのではないでしょうか．

## 4

自国の現状を憂慮するパーパグアン国の君主は地球人たちにすでにモーモリ国の名を挙げて，この注目に値する国へ旅するように忠告していましたが，そこへいたる道程で二つ

の王国，すなわちプルンプラッコ国とビーリビ国を見ることになることを伝え，両国の君主への推薦状をもたせます．パーパグアン国を無事脱出した「私」たち一行は，半日の飛行の後，眼下に新たな町を発見し，そこから半ドイツ・マイル離れた地点に降下して，徒歩で町に向かいます．しかし町の入り口で門衛によって誰何され．通行証をもたないために怪しい徒輩と疑われて，武装した何人もの兵士によって連行され，投獄されてしまいます．推薦状は何の助けにもなりませんでした．そして，ここがヴィラ，プルンプラッコ国の首都であることが判明します．

またしても眠れぬ長い一夜が明けて，ほとんど取調もおこなわれずに，即刻判決が言い渡されます：兵役に就くか，公衆の面前で五十叩きの杖刑を受けるか，つまり死刑もどきの刑罰を甘受するか，翌日までにとくと思案しておくように，と．坊主たちの手を無事逃れたと思ったらすぐまた兵隊の手中に落ちた一行は，我身の不運を呪いながらも，番兵に酒を買わせて，その酒で番兵を供応します．この男は，後にスヴィルルーという名前であることが分かりますが，酒に口がほぐれて，君主の色欲と物欲に発するこの国の戦争と戦争継続のための国民にたいする苛斂誅求とを慨嘆し，兵士確保のために手段を選ばない軍事独裁的君主を非難し，そしてその結果に呻吟する国民の現状を地球人たちに訴えます．一行は元々嫌気がさしていた牢番を籠絡し，その手引きで夜陰に乗じて脱獄して，この国から逃げ出すことに成功します．しかし案内人を買って出たスヴィルルーには，大いに不満があったとしても，だからこそまた一行の甘言に乗せられたのだとしても，この兵営国家の脱走兵となる以上，相当の覚悟と見通しが必要だったはずです．彼の覚悟の程はしかと分かりませんが，見通しの方は，続く飛行中の彼の忠告からも容易に見て取れるように，理想の国モーモリでの生活だったのでしょう．

ヘルマントはこの軍人王とその戦争について，ロシアのエカテリーナ二世が始めて，ハープスブルクのヨーゼフ二世が加勢した 1787-91 年の対トルコ戦争を示唆していますが，断定は避けています．パーパグアン国に理想的君主としてヨーゼフを待望しているヘルマントにしてみれば，それも当然かもしれません．それはともかく，ここにもう二つ，文字どおり軍人王と称せられたプロイセンのフリードリッヒ二世とその父王フリードリッヒ・ヴィルヘルム一世の名を挙げておくことが必要でしょう．この対トルコ戦争だけがこのプルンプラッコの段の戦争のモデルだったはずはなく，三次にわたるシュレジア戦争を同じ脈絡で忘れる訳にはいかないからです．

兵士確保の，つまり兵士徴募の遣り口に関しても証言にこと欠きません．1781 年旅の途上，学生証を提示したにもかかわらずヘッセンの徴募官に捕らえられ，やがて大西洋を越えてアメリカへ輸送されたヨーハン・ゴットフリート・ゾイメとその自伝的作品『我が生涯』はもっとも世に知られた事例でしょう．この時ヘッセン=カッセル方伯によってイギリスに売られた一万二千人以上の男たちは，彼と同様に違法に，あるいは無法に捕らえられたヘッセン国民や外国人であって，独立戦争が戦われているアメリカに兵士として輸送され，イギリスのために戦うことを強いられたのでした．因みに，当時悪名高いこの兵士売買によって，方伯は二千百万ターラーの現金を手に入れましたが，この商品は方伯の専売

特許だったわけではありません．当時何人もの領主がこの商売に手を染めて恥じなかったのです．しかし，『一般ドイツ文庫』の先程の書評子は，この軍事独裁国家プルンプラツコのこのような内情を抉り出す作者の批判をも，教権国家パーパグアンについてのそれと同様に，聞き飽きて新味がなく退屈きわまりない，と嘯いています．

5

次の旅程に当たるビーリビ国への着陸を「私」たちは，案内人スヴィルルーの忠言を容れて中止し，そのままモーモリ国に直航するべく舵を取ります．ビーリビ国もプルンプラツコ国と同様の軍事独裁国家で，なお悪いことには，低能の現君主は坊主たちに誑かされていて，坊主の言いなりに理性に悖る悪しき勅令を布告して健全な人間の英知を迫害し，いつも何人かの錬金術師をとりまきにして賢者の石の発見に現を抜かし，ついに僅かばかり残っていた理性すらも失ってしまっており，大いに剣呑だ，というのです．ヘルマントによれば，この段はバイエルン公国の当主である選帝侯カール・テーオドアとその「啓明結社迫害令」を指示しています．因みに，ミュンヒェンにおけるこの迫害は1785年から89年まで続きました．

火星上の特別の国と，パーパグアン国の君主によってもプルンプラツコ国の元牢番によっても等しく推賞されたモーモリ国の首都ワシャンガウまでは，スヴィルルーによれば，ここビーリビ国の首都ゼーポリスからまだ200マイルの距離がありますが，一行は，かつてモーモリ国に滞在したことのある案内人と順風と上天気とに恵まれ，何事もなく一日(火星の一日は地球の一日よりいくらか短い，と説明されています)でモーモリ国に到着し，見物人の殺到を避けるために首都のかなり郊外に着陸し，用心のため水夫たちをその場に残して，徒歩で首都に向かいます．

しかし，ここには，パーパグアン国やプルンプラツコ国のような都城としての都門も城壁も，したがってまた通行証を検査する制服と武器で身を固めた衛兵の姿もなく，同様にまた石造りの神殿も宮殿もありはしません．人々は，男も女も老いも若きも，生まれる時に自然が装ってくれたままの姿で往来しています．家屋はといえば，何の技巧も装飾もない，小さな低い小屋でした．町も人も家も，いずれもいわば丸裸なワシャンガウは，果せるかな全く特別の国だったのです．一行の驚きはこれで終りません．一行の面前に若い男女の衆目もはばからぬ交合図が展開します．息子の純真を慮り，かつはまた人々の道徳的頽廃を疑い，「私」は憤激して二人を引き離そうとして，スヴィルルーに引き留められます．ここはモーモリなんです，ここでは禁じられていないのですと，彼は大笑いするばかりです．憤激収まらぬ「私」は避難場所として宿屋を探しますが，彼はまたしても「私」を笑い飛ばします：選取り見取り，「私」が足を踏み入れた家がすなわち宿屋であって，おまけに無料，そもそもここの人々は貨幣というものを知らないのです，と．そして，ワシャンガウ万歳！　モーモリ万歳！　と叫ぶなり，いきなり，今を花盛りの成熟した乙女に抱きつきますが，手酷い平手打ちで撃退されます．この反撃で，事情の全く分からない「私」たちはもとより，事情通のはずのスヴィルルーも面食らうことになりますが，案内人によっ

てここの風習と説明されたものが彼の下司な勘ぐりとは異なる原理によっているらしいことは，読者には十分に推測できることでしょう．

理解を越えた光景や出来事にすっかり混乱した一行がとりあえず辺りで一番立派な家に入ると，畏敬の念を覚えさせる白髪の老人が真心を込めて手を差し伸べ，親しげに迎えてくれます．屋内はきちんとしていて，それなりに美しく，簡素で快適な住まいで，どこにも贅沢と富裕の徴はありません．スヴィルルーを通訳にして数日の宿を乞うと，快く受け入れられ，すぐさま土地の果物とミルクとが供されます．そして，服装から一行を異邦人と考えた老人の問いに答えて，「私」たちは自分たちの出自と旅の経緯をすべて物語ります．歓談は深更に及び，漸くにしておやすみの挨拶が交わされます．

翌朝から，この老人は「私」たちのモーモリにたいする地球人的先入見を矯正し，「私」たちにモーモリ流の考え方を手解きし，「私」たちを真のモーモリ理解へと導く良き教師となります，すなわち老人は，ここで詳細に立ち入る余裕はありませんが，モーモリの人々の太陽を神の徴とする信仰と信仰の自由について，自然と理性への深く全面的な信頼について，人間の理性とその使用の自由について，あるいはモーモリの人々の社会関係について，結婚と家族について（この脈絡で，人目をはばからぬ交合という道徳的頽廃なるものにたいする「私」の批判は論駁され，「私」は，それが自然の衝動の純真な充足として本来的に許されていることを承認するにいたります），個人と社会の道徳について，政治的支配関係の無効について，あるいはまたモーモリの人々の経済関係について，労働と生産について，自然の豊かな恵みの享受について，分配と所有について，私的所有の否定について，説明し，質問に答え，反対に質問し，吟味し，改めて説明し，こうして「私」は，眼から鱗が落ちたように，物事を新しい眼で見ることができる自分を発見することになります．

ここに雰囲気として，つまり必ずしも理論としてではなく，ルソーの自然法的な社会哲学と，ブーガンヴィルやフォルスターのタヒチ島に関する美しい報告との混合を見出すことは，当時の読者にとっても今の読者にとっても，容易なことにちがいありません．例えばこうです：豊かな自然の恵みを享受し，嫉妬心も名誉欲も知らず，平等の権利を持ち，平等の義務を果たし，性的な羞恥心からも所有欲からも自由で，文明に汚染されずに簡素な生活の中で自足する理想郷的世界（村田竜道さんの簡明な説明の言葉を借用しました．190／191 頁）．しかしながら周航記の報告は否応なく，この理想郷的世界の可能性が時代の世界史的プロセスの中で虚構化していく状況を大なり小なり写し取っており，現実のレベルにおいては，この理想郷的世界を「鏡」として掲げてのヨーロッパの批判的照射ではなくして，後者による前者の，つまり，いつでもどこでも繰り返されたように，ここでも文明による未開の収奪こそが貫徹されようとしていたのです．

ところで，あの老人の導きの下，初めのうちこそヨーロッパ人的偏見からモーモリの人々を粗野で野蛮な人々と見くびっていた「私」は，後になればなるほど深い感銘を受け，最後には彼らをもっとも幸福で賢明な人々と考えるようになり，ヨーロッパあるいはドイツと比較してこの国を賞賛するにいたります：坊主も，医者も，兵隊もそして——王も持たない，三倍も四倍も幸福な国，と．この歓呼の言葉は，少なくとも当時の読者には，モー

モリ像を形成している三つ目の成分，すなわち理想の共和国・市民社会としてのアメリカを想起させたはずです．そしてこの連関において，モーモリ国の首都ワシャンガウの名によって新国家アメリカの首都を想起する読者も多かったはずです（序でに言えば，ヘルマントはモーモリ国の名前に，アメリカ革命におけるマザー・コロニー，マサチューセッツを読取っていますが，私は，ルソー由縁の地であるパリ郊外のモンモランシーをモデルとして挙げることもできると思います）．ヘルマントも指摘していることですが，例えば，プロイセン軍の士官を退役してアメリカに渡り現地軍の将校として独立戦争の一翼を指導したフリードリッヒ・ヴィルヘルム・フォン・シュトイベンは，アウグスト・ルートヴィッヒ・シュレーツァーの雑誌『歴史的および政治的内容を主とする文通』（あの『国家報知』の前身誌）に一書を寄せて，独立を求めて本国にたいし武装蜂起して戦う植民地アメリカを美しい幸福な国と評し，きたるべき共和国アメリカについて，王も，大司祭も，搾り取る大地主も，そして怠惰な貴族ももたない国であれ，そしてここでは誰もが幸福であれ，貧困という災いを知らぬままであれ！　と熱烈な願いを表明しているからです（第7巻，1782年）．

この願いが満たされなかったことはその後のアメリカ合州国の歴史によって証明されていますし，当時においてすでにそれが虚構であったことも明白ですが，しかし，理想的な社会をたんに夢想するばかりでなく，それを実力行使によって実現しようとするこの革命的闘争こそ，未開と称せられるタヒチ島民すらもがヨーロッパによる収奪を防ぎ止めて，また島民間の現行の支配・非支配関係をも克服して，モーモリ的理想郷を自ら，したがって楽天的でお節介なヨーロッパの啓蒙主義的理想家たちの指導・助力を必要とせずに実現することのできる，ひょっとしたら唯一の方法であることを，本書の作者ガイガーは十分承知していたはずなのです．

ガイガーは1789年に一イギリス人の旅行記をその友人として刊行しています．無論匿名化の結果であって，自伝的文章『アードルフ』と比較するならば，いくつもの箇所で同一内容の記述を見出すことができます．出版地もアムステルダムと偽装されています．郷国に容れられず各地を放浪して歩いたガイガーは，この書簡体の旅行記『シュヴァーベンの一部とスイスの最も人に知られていない地方のいくつかを通る一イギリス人の旅』の中で，スイスのアペンツェル州について報告しています．彼は，ローダ川を間に挟んだ外ローデンと内ローデンとを，モスリン生産家内工業と牧畜，石造りの大きな優雅な家と小さな低い小屋，都会的な家具調度や銀製の食器類と干草のベッドや多目的の丸太の家具や乳製品の食事，富裕の特徴と貧乏の外観，贅沢と簡素，文明と自然，人為と素朴，技巧と純真というように対比的に紹介した上で，内ローデンの生活をアルカディア的な幸福な生活として，あるいはプラトンの共和国的な道徳的なそれとして描出し，繰返し人々の自然と無垢と素朴を賞賛しています．『一地球住人の火星への旅』の読者ならば，ここに躊躇なくモーモリ人の理想郷的生活を認めることでしょう．大事なことは，彼がこの幸福にして道徳的な生活を，族長時代の牧歌的生活として夢想的にではなく，現実の歴史過程の中で彼らが戦いとった成果として教訓的に語っていることです：気高いアペンツェルの住人は，真っ

先に獅子の勇気をもって専制的な代官たちの鉄鎖を打砕き，その軛を振り払った，と．この先例に勇気付けられて他のカントンもその後に続き，彼らが現在享受している自由を手に入れたのだ，と．そして，アペンツェルの住人，しかも内ローデンの人々こそスイスの自由の主導者なのだ，と．

ガイガーが同業の先輩として一時期尊敬していた，しかし後に変節漢として拒否するにいたるシューバルトも，その雑誌『ドイツ年代記』で，同様の理想的社会の達成を夢想しています(「1800 年からの報知」，第 1 巻第 46 号，1774 年)．ここでも牧歌的田園に展開する人々の幸福な生活を規定するキー・ワードは，自然と素朴，簡素と単純，敬虔と無垢，そして健康と知足なのですが，しかしこの美しい田園も平和に草を食む家畜たちも隅々まで管理の手が行き届いており，勤勉な生活の中で公共心や公共的利益が強調され，キリスト教的諸価値が尊重されています．そしてこのことに見合って，達成の手段としてシューバルトが注目しているのは，ガイガーの場合のような自由と独立を求める革命的闘争という方法ではなく，啓蒙主義的民衆教育であり，マリーア・テレージア治下の神聖ローマ帝国における学校制度の最新の整備と改善を賞賛し，これに期待することで，文章は終ります．こう見てくると，ガイガーとシューバルトとの懸隔は大きい，したがってガイガーと時代との懸隔はもっと大きいと言わざるをえませんが，そのシューバルトがその雑誌において，ホーエンアスペルク要塞に政治犯として投獄されるまで，一貫してアメリカ革命に味方して反イギリスの論陣を張ったことと，釈放後の再刊を許された雑誌ではフランス革命の報道に力を入れたことだけは，公平を期して記しておかねばならないでしょう．

## 6

地球人一行のモーモリ滞在もいつしか時が経って，やがて地球への帰還の日が来ます．なるほど「私」は，モーモリとここに住む人々のことを知れば知るほど，一方でここを去りがたい愛着の気持を強めることになりますが，他方で，ここでの見聞と体験を故郷の地球に伝え，そして地球の住人たちによき感化を与えることこそが自分の使命と強く感ぜられて，留まるべきか発つべきか，心が揺れもします．しかし，ついに使命感が勝を制します．一日，あの白髪の老人たちに見送られ，互いに別れを悲しみながら，一行は一路地球へと旅立ちます．「私」は筆を擱くにあたって記します：私が地球で最初にすることは，この不思議の物語を地球の同胞に提供し，そして彼らに，自然と素朴だけが人間を幸福にすることができるのだということを，納得してもらうことだ．彼らが様々な実例を知って賢明になり，この偉大な真実を認識し，どうかそれに従ってくれますように！　そうなれば，私の旅は大いに報われることになるだろう，と．

科学技術の進歩なるものへの盲信・狂奔，自然からの逸脱・自然の否定は堕落と破壊を招来するだろうという，この作品の最初の段の「私」の予感が，そして作品の最後において「私」によって確信をもって主張されることになるところのものが指し示しているのと，この偉大な真実なるものは同じい内容であって，それはまた白髪の老人の信念そのものでもあります．老人は，地球の人間たちの一切の営み，宗教や社会，政治や経済についての

私の説明をうけて，人間たちの愚行を悲しみ，その未来を憂えて，人間たちに警告の問いかけをしないではいられません：おお，人間たちよ，人間たちよ，自然から離れ，——自然がお前たちに指し示している道を見失うほど，お前たちが盲目でありうるのが，私には不思議でならない．この自然をお前たちの中に植えつけ，その自然に語らせることによって，神は父親のようにお前たちに呼びかけているのに．お前たちは自然の声に耳傾けることなく，法の拘束力によって神以上に万事をうまく遣り果せることができると思っているが，どうしてそう思うことがお前たちにはできるのか．自然が指し示している道を離れていけばいくほど，自分たちがますます破滅に近づいていくのが分らないのか，と．

老人が説く自然とこの自然を本質とする理性とを時代との関連において説明する必要があることは承知していますが，その余裕は紙幅の関係で今はありません．しかし，自然と人間の幸福とについてのこのような言説を，現代の観点から単純に，現実離れした時代錯誤の修辞的あるいは図式的表現とみなして軽視する気は，私には毛頭ありません．ガイガー自身さしずめ遅れてきた全共闘の闘士然としていると見えるでしょうが，だからといって，同時代批判の本書のメッセージを現代の私たちが，季節遅れあるいは季節外れと，寛容に憫笑する資格と理由が自明のように与えられているとは，到底思えないのです．

7

ガイガーは，同時代のきわめて乏しい証言によれば，有名な博士であり，不本意にも自分自身を多くの点で変人として目立たせてしまった男であり（『アードルフ』の編集者による脚注），彼は人に，罪深い，中傷癖のある，危険な人間との印象を与え，そして山師，詐欺師，香具師と呼ばれる一方で，自らは自分を真理の殉教者とみなしていたと報告されています（同「送付者の付言」）．ヘルマントによれば，彼のことを伝える無名氏による，発見されているほとんど唯一の言及は放浪の弁士としての彼の朗読を嘲笑し，その時の彼の態度を好戦的と評しています（フィーリップ・アントン・ジークムント・フォン・ビーブラの雑誌『ドイツについての，そしてドイツのためのジャーナル』1785年4月20日号，「来信の抜粋」所収）．本人は，本名を明かして出版した数少ない書物の一つで，自身を人類の弁護士と規定し，国家と人類とに責任がある人間にして市民として発言しており（『ハープスブルク重罪刑法は政治，そして国法および自然法に適合しているか』1788年），シューバルトはその雑誌でこの論難書を取上げ，この仕事の故にガイガーを人間諸権利の弁護人の一人に数えています（『祖国年代記』1788年第48号，「ドイツの刑法について」）．また遺稿においては，アードルフ＝ガイガーは，人一倍感受性に溢れ，知力に富み，正義感の強い，しかしそれ故に世の中の一切の不正と理不尽に敏感に反応せざるをえない，そして陰鬱で孤独癖の，しかしまたその分だけ心を許すことのできる友を求めないではいられない人間として性格づけられ，その生涯は不足と不満，圧迫と迫害に満ちた短い苦難の一生として描かれています．前身誌『ドイツの観察者』をその「人類と市民社会の幸福と悲惨とに関係を有する，心に留めるべき出来事の記録庫」という副題もろとも引継いだ時代批判・社会批判の雑誌『新・ドイツの観察者』に彼が協力したということも，こうしたガイガーの

有様と無縁ではありえないと，私は考えます．

彼は，自分の信念に誠実であったが故に，そして自分の正当性を確保するためにこの誠実さを自分にたいして常に証明する必要があったが故に，世の中の諸々の不正・理不尽に多少目をつぶって折合いをつけることが，生活のためにであっても困難であり，その分だけ世に容れられぬ自分に苛立ちを覚えていたのではないでしょうか．狷介な彼の言動は，その作品に見て取れるように，概して鋭角的で好戦的であり，直截で執拗であり，過激で挑発的だったと言えます．したがって彼の批判・攻撃は，それを受ける側，つまりは体制の側からするならば，無頼なはみ出し者の押し付けがましいお節介，恨みがましい意趣返し，妬みがましい悪口雑言以外の何物でもないでしょう．だから，これに応えて本気で弁明したり反論したりするだけでも相手をまともに扱いすぎることになってしまうので，実害のないかぎり無視するのが最善の策であり，それで気が済まなければ，共同戦線を張って反撃に転じて，必要ならこの無頼漢を袋叩きにすることになるのではないでしょうか．

そしてこの状況こそ，ガイガーの，雑誌を除く 11 点の著述中 8 点の作品が匿名で，場合によっては出版地名すら偽装して出版されたことの，あるいはそのようにして出版されざるをえなかったことの背景を成していると，私は考えています．前景には，一方でガイガーの側の主体的条件として，『アードルフ』から判断するかぎり，彼がほとんど常に経済的に逼迫し，借金の返済など，窮地に立っていたらしいことを挙げねばなりません．彼の名前を冠した出版物がどの程度売れたのか／売れなかったのかを知るためには，必ずしも成果を期待できる訳ではない厄介な調査が必要ですが，彼の著述はすべて多分大して売れた訳ではないらしい，あるいは少なくとも貴重とはみなされなかったらしい，と言わざるをえません．ヘルマントの調査によれば，彼の個々の作品はドイツを含む大陸各地の図書館では全くと言って良いほどに所蔵されておらず，所蔵されている場合でもいくつかの図書館でそれぞれ異なる 1 部のみであり，いくつかの作品の場合にはイギリスやアメリカのいくつかの図書館がそれぞれ異なる作品を 1 部のみ所蔵しているばかりで，その上タイトルのみ知られていて実物が未発見の作品も複数存在しているからなのです．そこで，原稿料あるいは印税を当てにしていたであろうガイガーが，作者名を出すのと出さないのと売り上げの点でどちらが得策か考えなかったとは到底想像できません．

ガイガーの仕事の匿名性にはしかし前景として，もう一つ，批判・攻撃された体制の側の客観的条件もありました．例えば，彼が一時期尊敬していたシューバルトも，彼が同人だった雑誌の前身誌『ドイツの観察者』の編集者ペーター・アードルフ・ヴィンコップも，筆禍問題で官憲によって騙し討ち同然のやり方で逮捕され，前者は 10 年，後者は 6 カ月拘禁されています．事前・事後を含めて検閲が家常茶飯事であった時代の，必要なら報復のために実力行使を辞さない体制のこのような遣り口を目の前にして，ガイガーは著書に本名を明かすことを躊躇する理由を，自らの経済的困窮以外にも十分にもっていたと言わねばなりません．日頃の言動と特に雑誌におけるその記事の故に概してお上の覚えのよくなかったシューバルトの逮捕の原因は，直接的にはマリーア・テレージア死去の誤報記事にありましたが，しかし同様に評判の芳しくなかったらしいガイガーが，1791 年に出版した

三幕の悲劇『悪徳はしばしば美徳，あるいは，レオノーレ・フォン・ヴェルテン』において，君主殺しの結末を用意したことは一種の冒険だったでしょう．主人公レオノーレの夫は南ドイツの一小国の士官で，君主は彼を，ヘッセン＝カッセル方伯のように領民共々イギリスに売渡し，彼らはアメリカへ送られて，革命軍と戦うことを強いられました．戦死したはずの夫がたまたま帰還して，君主である淫蕩な侯爵の陰謀によって妻の被った災厄を知ります．フランス革命におけるルイ十六世の処刑を先取りするかのように，ガイガーは彼を，領主によって翻弄された妻と両親の復讐者として登場させ，彼に剣をもって侯爵を刺殺させ，そしてこの君主殺しについて，私のローラの復讐をしたのだ，そして私の祖国を極悪非道の暴君から解放したのだ，と言わせているのです．

身命の危険を感じてそれに対処するのに何の不思議もないはずですが，しかし一見不思議なことに，ガイガーはこの危険な作品に「ガイガー博士著」と著者名を明かしています．彼が著者名を明かしている作品は，遺稿をここで云々する必要はないでしょうから，他に2点あることになります．一つは上で触れたハープスブルク重罪刑法典論難の書であり，もう一つは四幕の喜劇『ドイツ人であるイギリス人．あるいは，かつてヨーハン・クラインマンと呼ばれていたサー・ジョン・リトルマン』(1789年)です．作者名を明らかにした彼の論難書の論調とその「一つの愛国的問題」という添書きと，そして彼の喜劇と悲劇の「オリジナルなドイツの喜劇」・「オリジナルなドイツの悲劇」という添書きを考慮するならば，ここに現れている，ドイツ論壇の歴史に，またドイツ文学の歴史に名を留めようとの文筆家として当然の野心あるいは気負いを過小に評価することは不当であり，状況を勘案するならば，むしろ勇気ある決意と見なければならないのではないでしょうか．

(1995.11.15.)